

第79回湘南科学史懇話会
2016年7月30日

**経済学・実存主義から公共哲学、統合
学、共生科学へ**
我が知的遍歴ないし発展と普遍的課題
山脇直司

1 若き頃の知的遍歴

1.1 一橋大学時代(1967.4~1972.3)

- 二つの問題意識

貧困問題と福祉のための経済学(経済研究)

- 実存主義へとキリスト教左派への関心

ベトナム反戦運動には共鳴。ノンセクト・ラジカルの立場。1970年代初めに信濃町の真生会館(カトリック系)を拠点に同人誌などを作り活動。シュガレ神父などと読書会。

大学時代



塩野谷祐一教授



真生会館



大学から大学院へ

- 「何のための学問か」という問いの重要性を自覚。しかし、実存主義と社会科学のリンク(結節点)を見いだせず、それを同時に追求できる哲学に関心を抱き、将来の留学を見据えて外国人教員のいる上智大学院へ進学。

大学院時代



上智大学院時代(1973.4~1977.2)

- チェコ人のアルムブルスター神父のゼミで、ヘーゲル『法の哲学』(1821)の現代的意義に開眼。倫理と制度論と人間論をリンクさせる視点を学んだほか、カントとシェリングの意義も習得。さらに、スターリニズム体制下東欧の人権弾圧の悲惨さとともに、神父がフランクフルトでアドルノのゼミに出ていた体験談とともに『啓蒙の弁証法』『否定的弁証法』の意義も学ぶ。

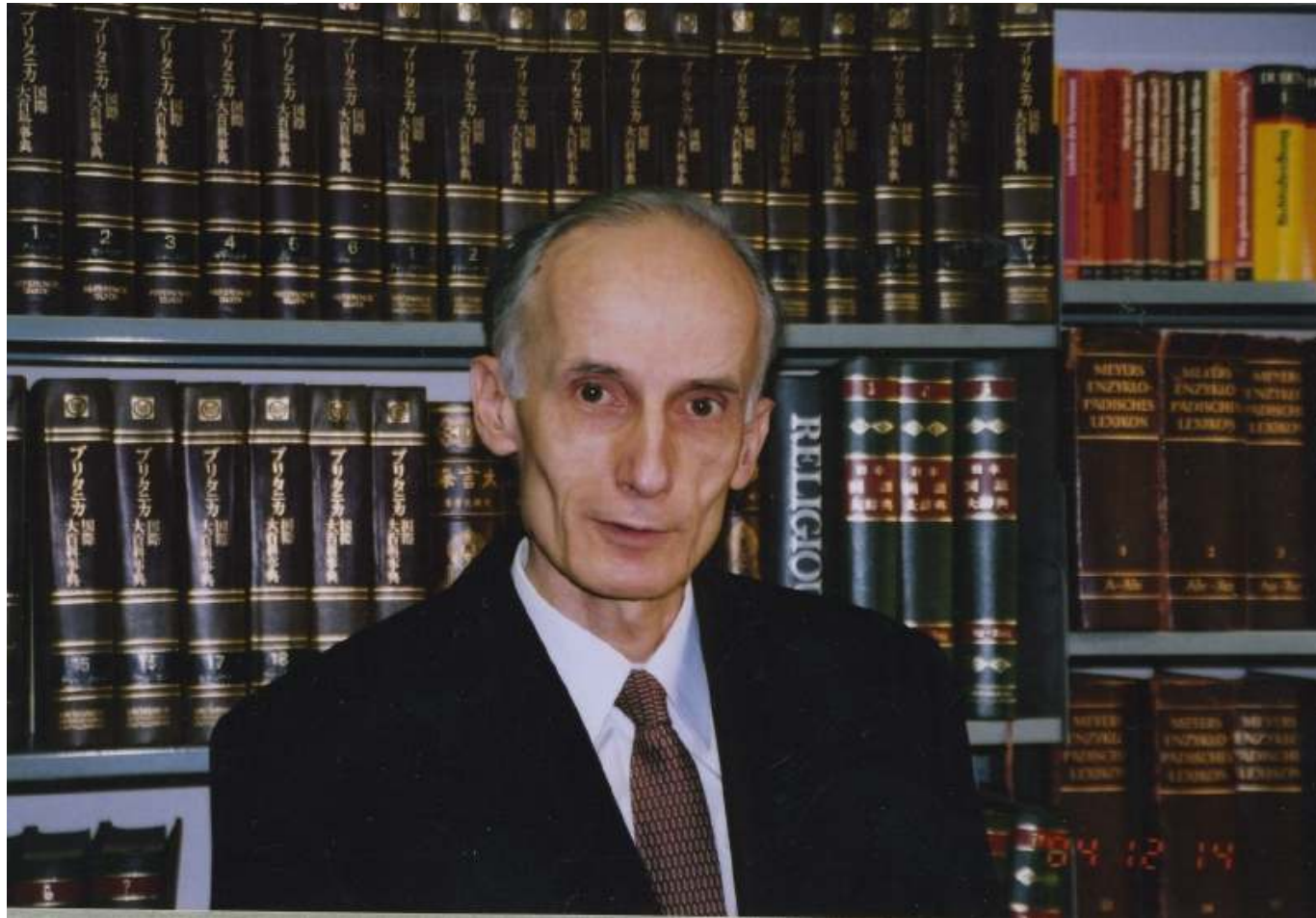
アルムブルスター教授



上智大学院時代

- 他方ドイツ人の中世思想の大家リーゼンフーバー神父ゼミでは、フッサール『イデーエン』やハイデガー『存在と時間』のゼミで現象学と解釈学の意義を習得。

リーゼンフーバー教授



1.3 ミュンヘン大学時代 (1978.3~1982.3)



色々な思い出満載のミュンヘン



ダッハウ強制収容所跡



多角的に学問に励む

- 主専攻は哲学、副専攻はプロテスタント神学と日本学。哲学では社会哲学的なゼミで、プロテスタント神学はドイツ観念論的なゼミで、日本学は江戸時代の思想的なゼミで、それぞれ単位を取得。特に、シュライエルマッハーに関するレポートで称賛される(これは後の日本語論文の成果となった)。また、古典語の試験では孟子を選択しその思想になじむ。
- 博士論文では、解放の神学やフランクフルト学派には批判的で、ハーバーマスと論争中であったローベルト・シュペーマンを指導教授に選び、テーマを当時ドイツ語圏の最先端の学問論争を論考することに決め、親しくなった助手などとも論議を重ねつつ執筆。

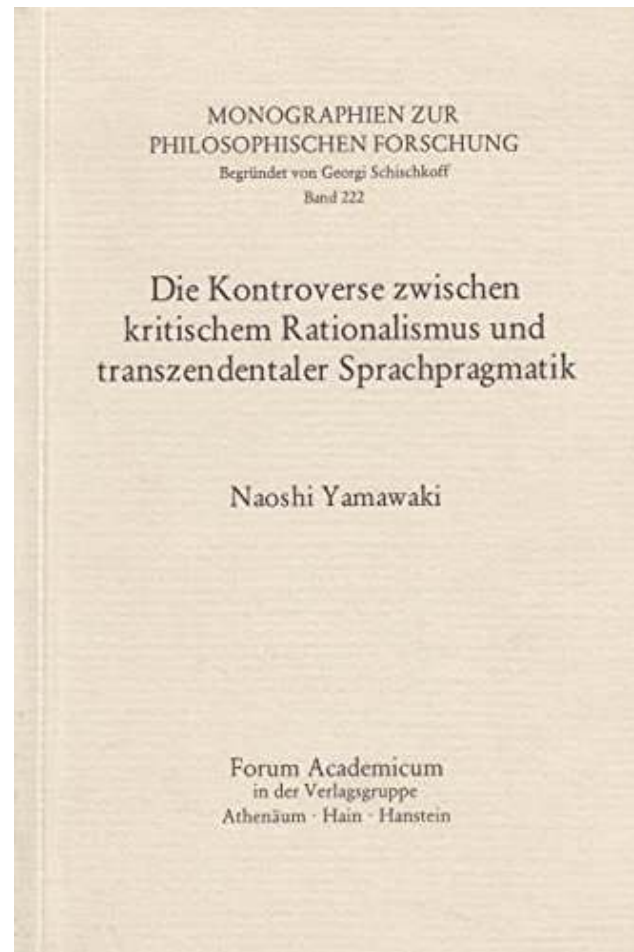
ローベルト・シュペーマン(1927ー)



学位論文

- 後に加筆して、当時から高名なシュペーマンの推薦により、『批判的合理主義(カール・ポパーが提唱)と超越論的語用論(カール・オットー・アーペルが提唱)』というタイトルの下、28マルクで出版した。「学問をする主体はどうあるべきかという」問題を、自然科学、社会科学、哲学に分節化して論じた内容の独創性には、当時も今も自信を持っている。

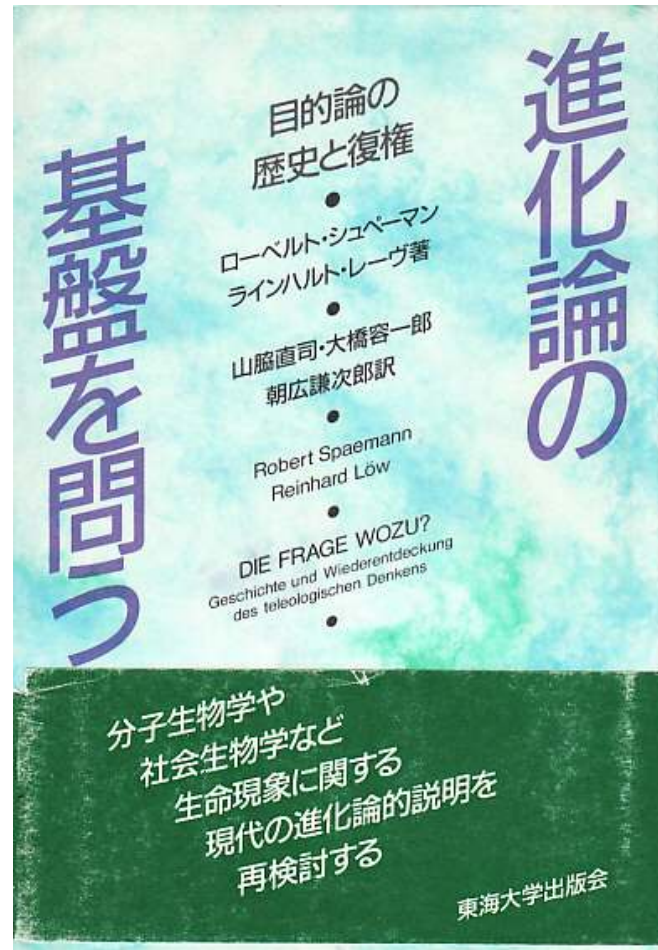
学位論文(1983)



東海大学教員時代(1982.4~1986.3) と上智大学教員時代(1986.4~1988.3)

- 帰国してから受けたカルチャー・ショックは多々あるが、特に目についたのは、一部のフランス思想を全西欧の現代思想と称して売りだす思想系ジャーナリズムの異様さであった。浅田彰や中沢新一らのニューアカは単なる「知の連想ゲーム」学派と称するべきで、その島国性や夜郎自大性は喜劇であり悲劇であったと今でも思っている。

恩師の翻訳(1987)



2 東京大学の四半世紀とその後



ヨーロッパ社会思想史(1992)



包括的社会哲学



新社会哲学宣言(1999)



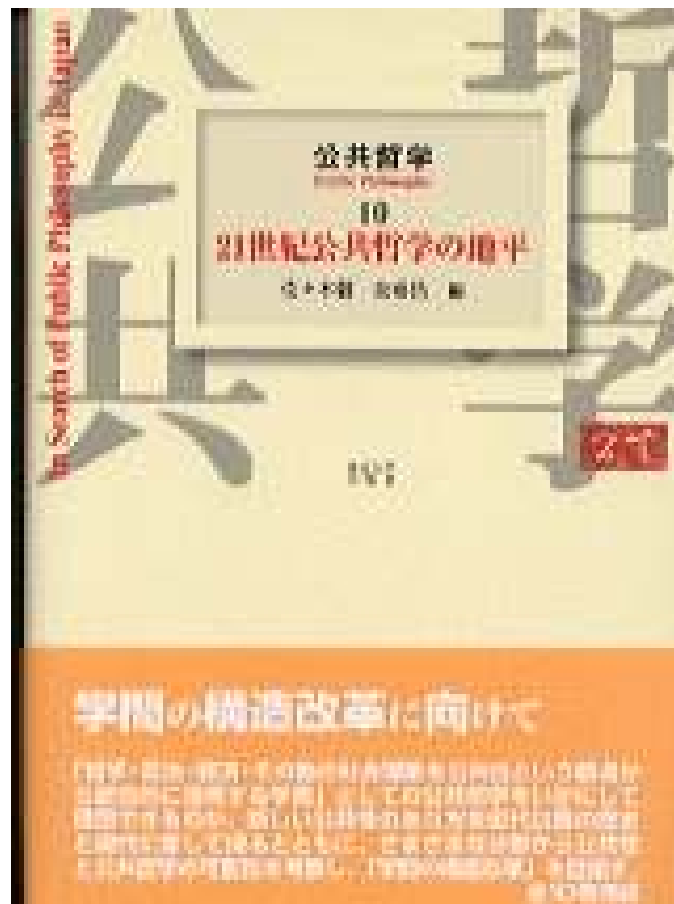
新社会哲学宣言

- プレ専門化時代(ヘーゲルまでの時代)、
 - 専門化時代(ヘーゲル以降、ヴェーバーの学問論を経て現代に至る時代)、
 - ポスト専門化時代(21世紀に作るべき時代)
- という学問論史観を導入し、また、生活世界とニュアンスを異にする「公共世界」という概念を導入したという意味で、重要な過渡期の作品

2.2 独自の公共哲学の展開 (2000.1~2013.3)

- 京都フォーラムの金泰晶氏からお誘いを受けてフォーラムに参加し、多くの知己を得た。
- 1999年にはソウル大学、北京社会科学学院、ケンブリッジ大学、ブリュッセルのEU本部などで会議に参加させていただき、2000年3月にはハーバード大学で、チャールズ・テイラーやその弟子マイケル・サンデルなどと討論したことは、忘れ難い。

公共哲学 シリーズ



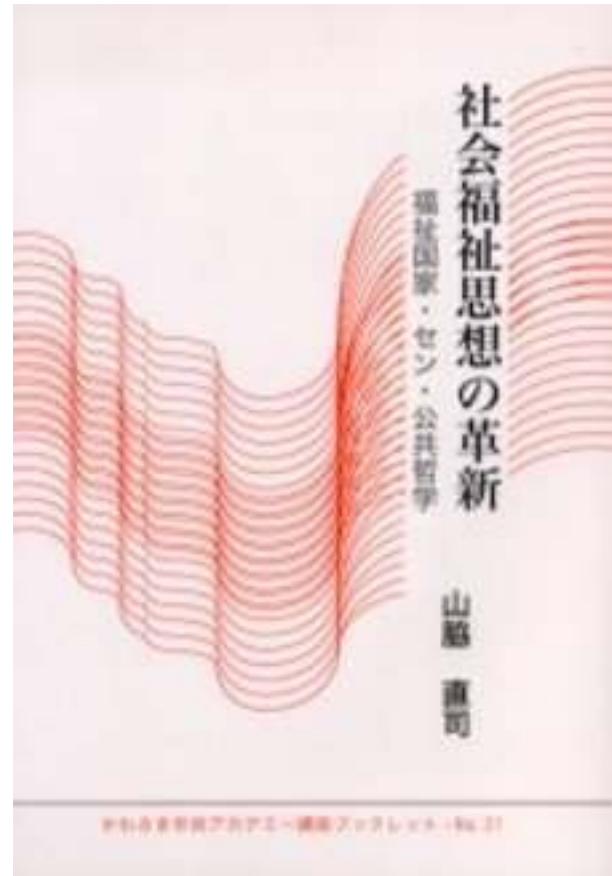
経済の倫理学(2002)



公共哲学とは何か(2004)



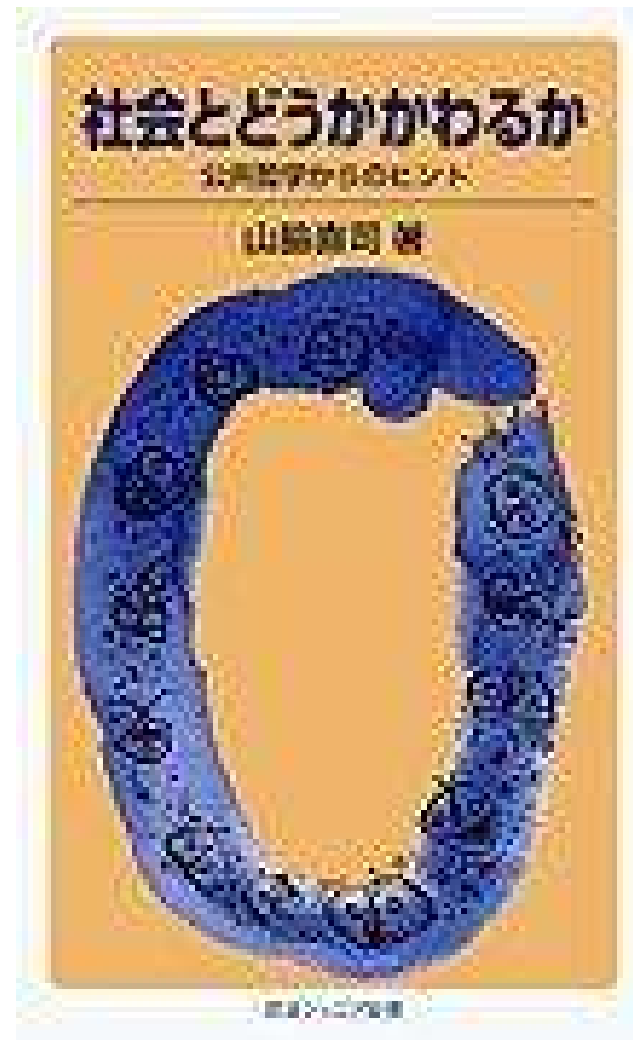
社会福祉思想の革新(2005)



グローバル公共哲学(2008)



社会とどうかかわるか(2008)



公共哲学からの応答(2011)



公共哲学とは何か

- 「市民的な連帯や共感、批判的な相互の討論にもとづいて公共性の蘇生をめざし、学際的な観点に立って、人々に社会的な活動の参加や貢献を呼びかけようとする実践的哲学(『広辞苑』第6版)」
- 「より善き公正な社会を追究しつつ、現下で起こっている公共的問題(public issues)を市民(the public)と共に論考する実践的哲学」(山脇直司の定義)

「個人と社会のかかわり方」の五つの パターン

- 滅私奉公（めっしほうこう）
- 滅公奉私（めっこうほうし）
- 滅私滅公（めっしめっこう）
- 活私開公（かっしかいこう）
- 無私開公（むしかいこう）または 滅私開公（めっしかいこう）

推奨したいライフスタイル

- 活私開公(かっしかいこう)
- ー私という個人一人一人を活かしながら、人々の公共活動や公共の福祉を开花させるライフスタイル)と
- 滅私開公(めっしかいこう)ないし無私開公(むしかいこう)
- ー私という個人の私利私欲をなくして、人々の公共活動や公共の福祉を开花させるライフスタイル の
- 組み合わせによる相乗効果。

そこからの帰結

- こうした(4)と(5)の組み合わせによるシナジー効果(相乗効果)が、「共福社会」や「共苦社会」へと繋がり、日本国憲法13条に記されている「諸個人の尊重」と「公共の福祉」の両立を考え、実現するためでも、望ましい。
- 人権は、自分のためだけにあるのではなく、「他者の尊重」も意味する。

グローバル公共哲学

- 21世紀の現代哲学という方位付けを持つ。
localという形容詞をthe place of activity という意味を持つラテン語由来の英語locusの形容詞として理解し、またlocalityに各自が置かれた「現場性」と「地域性」の双方の意味を付与し、「各自が置かれた現場や地域に根ざしながら、全地球的な視野でpublic issuesを論考する学問・思想」

グローバル公共哲学

- これによって、論者が一体どのような視座で諸問題を語っているのかが明確にされ、現場や地域の文化、歴史、自然環境のレベルでの多様性が尊重されつつも、globalismにも特殊主義(localism)に陥ることなく、transversal(普遍的、通底的、横断媒介的)な諸価値＝善(平和、公正、人権、福祉、地球環境など)を論考することが可能となる。
- なお、そこで前提となっている人間観を哲学的に表現すれば、応答的・多次的・生成的「自己－他者－公共世界」理解という形で表すことができる。

公共哲学の担い手

- 多種多様な現場や地域において公共世界に関わる人々(一般住民、学者・教員、公務員、ジャーナリスト、NGO／NPO関係者、経営者、会社従業員、科学技術者、医療関係者、宗教関係者etc.)が、公共哲学のステークホルダー(担い手、利害関係者)と言っている。一般住民やNGO／NPOのみならず、公務員が関わる公共性とは何か？ジャーナリストが関わる公共性とは何か？教員・学者が関わる公共性とは何か？経営者が関わる公共性とは何か？科学技術者が関わる公共性とは何か？医療関係者が関わる公共性とは何か？宗教関係者が関わる公共性とは何か等々、各自がそれぞれステークホルダーの意識を持って現場で問い続けることが必要。

公共哲学の方法論

- 社会調査に基づく現状分析（ある論、あった論）
- 各自が抱く理想の追求（べき論、ありたい論）
- 様々な条件の下での政策の実現可能性の熟慮（できる論）
- これらを区別しながら、統合を目指す。

(1) 「ある論・あった論」

「我々は何を知らなければならないか」「我々は何を知りたいのか」という問いから出発し、自然現象や過去と現在の社会的現実や現場に関する経験的実験や調査。自然諸科学や歴史学を含む社会諸科学の学問が、この分野に属する。

(2) べき論・ありたい論

「我々は何をなすべきか」「どのような社会を望むのか、望まないのか」などの問いかけから出発し、公正（正義）、公益（共通善）、人権、平和、福祉、健康、安全などの諸価値を論じる規範理論。社会倫理学や（狭義の）公共哲学などが、この分野に数えられうる。

(3)「できる・できない」論

「我々は何を遂行できるか」という feasibility への問いから出発し、未来における規範の実現可能性に関する政策論的な研究。それは(2)と結びつく。科学技術政策を含む公共政策や社会政策がこの分野に属する。

WA(和、輪)の思想と Justice(正義) の両立

- ユネスコ憲章の序言「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人は心の中に平和の砦を築かなければならない」に対応して、WAは何よりもWAR(戦争)との対比で考えられた平和を意味する。
- 「和して同ぜず = Harmonizing in Diversity and Reconciliation」。「和」は、異なるものを取り入れながらも調和し、ダイナミックに発達していくもの、「同」は、同質的なものの集合体(春秋左氏伝、国語)。
- さらにWAは、「和らぎ」や「和やかな」を含蓄し、「連帯の輪」をも指しうるので、「WAの哲学」は平和実現のための「柔和で確固たる連帯」の哲学的理念となり得る。

WAと正義

- しかし他方、まあまあ主義に墮したり、個人やマイノリティの抑圧の正当化に加担しないように、WAはSocial Justice（社会的公正）やRestorative Justice（関係修復的正義）の思想によって、補完・強化されなければならない。「活私開公」とWAの補完。

2.3 東大退職後の活動と現在の問題意識

- 公共哲学をより実践するために、学生の7割が社会人の通信制大学星槎大学を職場に決めた。共生科学部という単科大学で、教育、福祉、環境、国際関係、スポーツ身体分野での共生の在り方を追究。現在副学長、また共生科学会会長に着任。共生科学概説を執筆刊行予定。

共生科学部というユニークな通信制 (学生の約7割が社会人)



共生社会の実現のための学問



星槎グループ(幼稚園から中・高大学 まで)の理念

- 人を認める。
- 人を排除しない
- 仲間をつくる。

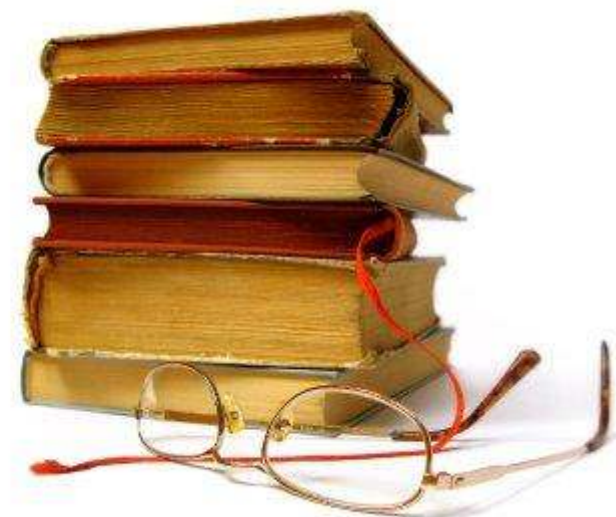
この順番は、順不同ではなくて不可逆。

統合学術国際研究所の非常勤所長

- ミュンヘン工科大学のクラウス・マインツァー教授やドイツ国立技術アカデミーとともに、独日統合学大会を毎年主催。その成果の一つ『科学・技術と社会倫理』（東京大学出版会）。これはJSTなどにインパクトを与えている。知の統合とは何か、人間存在の統合とは何かの追究。ここを拠点に、教養教育の在り方を見直す作業も企画。

統合学術国際研究所

現代の諸学問を通底する思考や知の
「統合」の可能性を論究する



最近の成果

科学・技術と社会倫理

その統合的思考を探る

山脇直司 〔編〕

池内 了

伊東俊太郎

今田高俊

鬼頭秀一

小島憲道

小林傳司

島 蘭 進

竹内日祥

直江清隆

野家啓一

平井俊顕

藤垣裕子

K.マインツァー

山脇直司

科学と科学者のあり方は？／科学では答えることのできない
トランス・サイエンスとしての倫理・公共哲学的課題にどのよ
うに取り組むか？／今後の教養教育をいかにすべきか？

3・11後の原発事故によって科学・技術と社会倫理に
突き付けられた課題を統合的に考察する。

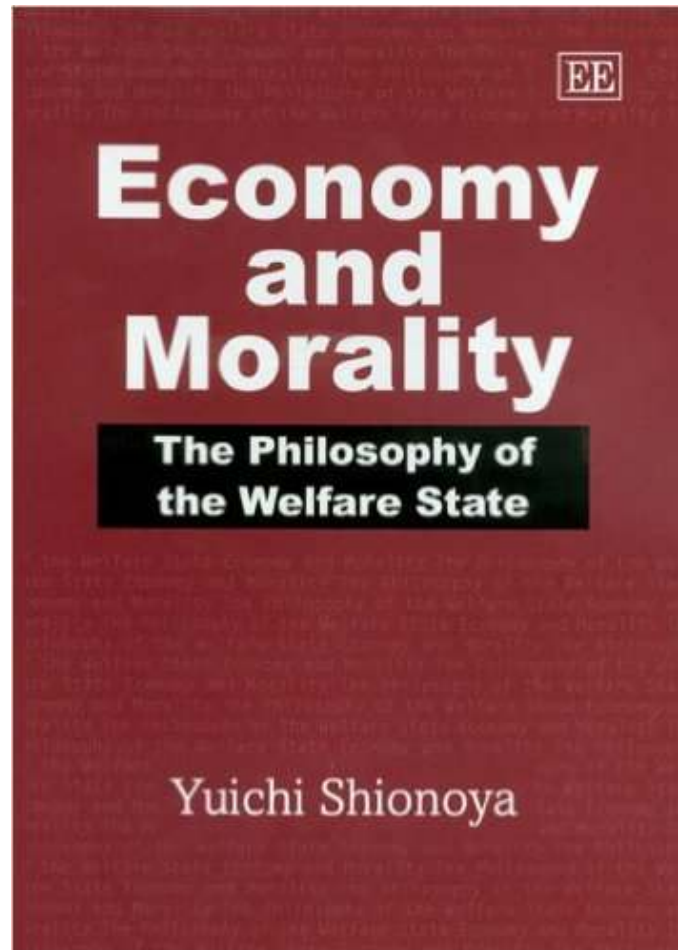
東京大学出版会

Reflections on the Legacy of Yuichi Shionoya's Economic Thought

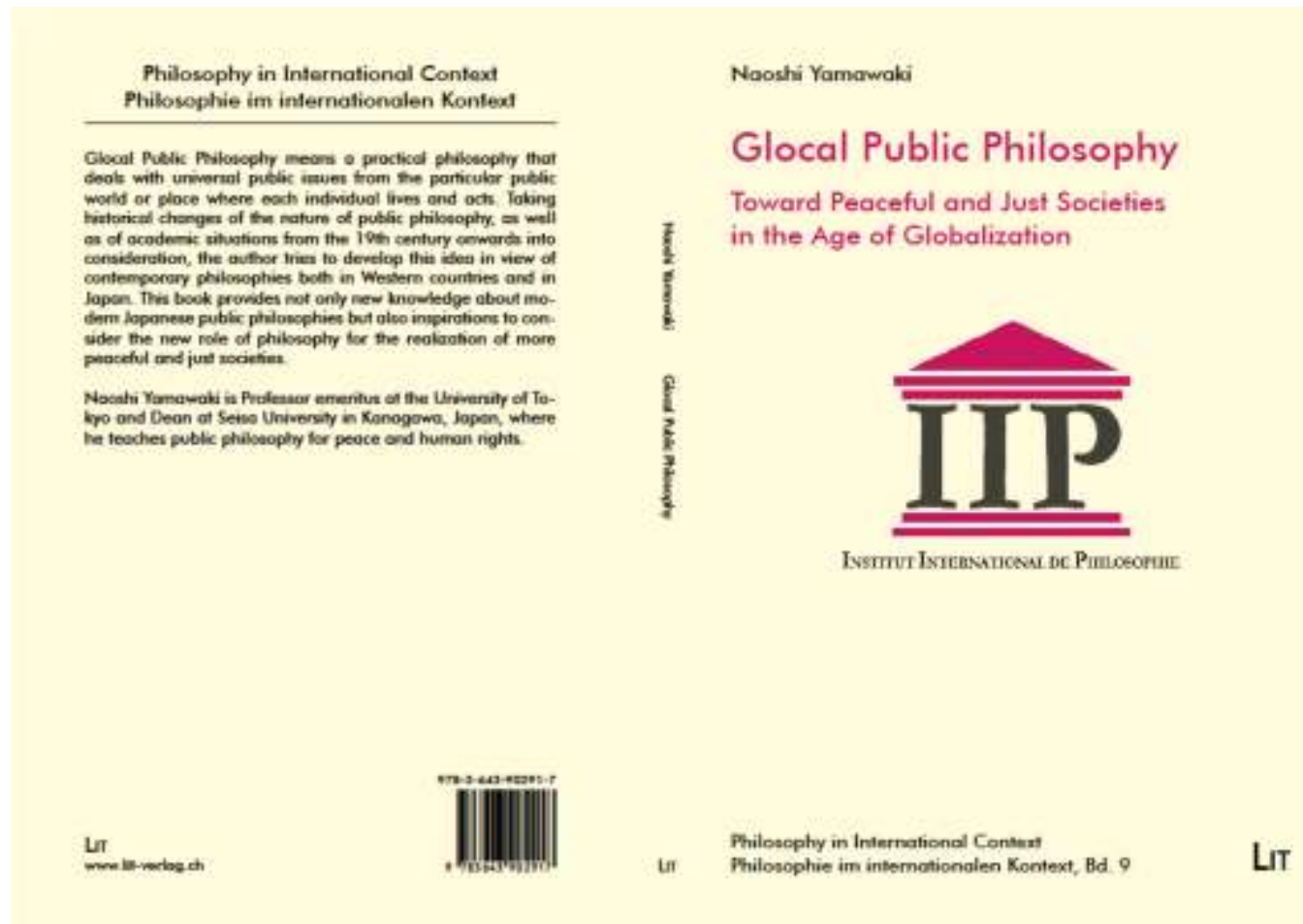
Naoshi Yamawaki

**Prof. emritus at the University of
Tokyo**

Economy and Morality, The Philosophy of Welfare State



Glocal Public Philosophy(2016)



現代公共哲学(執筆中)

- 1920年代から現代までの公共哲学の展開を、英語圏、日本語圏、ドイツ語圏、フランス語圏に渡り、独自の視点から概観する通史。

21世紀現代哲学の課題

- 1 自然における人間の位置——自然哲学の課題: ポスト・ダーウィニズムの哲学、生命倫理etc
- 2 科学・技術の進歩と社会倫理——社会哲学の課題①: 近代のプロジェクトと核文明、環境倫理etc
- 3 文化と歴史の多様性と普遍的価値——社会哲学の課題②: ポスト・世界人権宣言の哲学、世界平和と公共的記憶の哲学etc
- 4 人間と政治のかかわり方——政治哲学の課題: 権力論と正義論、公共圏の行方etc
- 5 共生のための経済は可能か——経済倫理の課題: 福祉、貧困、社会的公正etc。

結び

皆様、御清聴有難うございました。